最後に

「何か目標に向かって行動している若者をこんなことで潰す社会があるというならば
日本社会は終わってしまうんじゃないか、と危機感が出た」

１２年前の僕の手記に、ある男性のこんな言葉が記されてありました。当時僕はD×Pのような取り組みを
するなんて思ってもいなかったけれど、そのときからすでに何かが始まっていたのかもしれません。

D×Pは、通信・定時制高校の生徒たちに、つながりと成功体験をつくるNPOです。最近はメディアでも
「こどもの貧困」と叫ばれるようになりました。僕達の高校現場でも、経済的貧困・人間関係の貧困状態にある
若者と関わる機会が非常に多く、「こどもの貧困」を実感する毎日です。
しかしTVにあふれる「かわいそうな子たち」のようなイメージと、実際に出会う彼らは、ほど遠いとも感じます。
高校生ひとりひとりはとても多様で、それぞれに可能性と強みがあります。そんな彼らの置かれた環境が、
不条理であってはいけない。そう思います。

誰だって人とのつながりや自信を持てる体験があれば変わっていける。
どんな状態になっても自分で将来を描けるようになる。それが希望を持てる社会なんだと思う。

僕たちがそれを作ろう。
国や行政に頼らず民間から動いていこう。そう思って５年が経った。
「ひとりひとりの若者が希望を持てる社会」はまだ遠いかもしれない。でも、諦めない。みんなでやろうと思う。
大人が希望を捨てて何になる。
僕たちは築く。たとえ遠い未来でも、希望はいつだってあるから。

理事長　今井 紀明

Dream times Possibility

「ユメ」と「可能性」

「ひとりの人間として、ネガティブな部分もポジティブな部分も両方認めながら、
高校生と関わっていく」という決意をこめて。
明暗を抱えながら人を受け入れる夕暮れの空の色をイメージして2色を配しました。
—
「d」と「p」の斜めのまっすぐなラインは、
「常に時代の変化に即して革新的な取り組みを行い、社会的インパクトを出す」
という決意を表しています。
—
線の中央は、高校生と社会をつなぐ「結び目」を意味しています。
—
Dream（心に描くユメ）とPossibility（可能性）が無限に広がるようにという願いを込めて
「∞（インフィニティ / 無限大）」の字が隠してあります。

認定NPO法人D×P（ディーピー）

540-0032
大阪市中央区天満橋京町1-27 ファラン天満橋33号室

札幌拠点：064-0804
札幌市中央区南4条西6丁目8-3 晴ばれビル9階（株）オフィスBee内

電話&FAX：06-7222-3001
メール：info@dreampossibility.com

WEB：www.dreampossibility.com
Twitter：@npo_DxP
Facebook：www.facebook.com/npodxp

銀行口座：三菱東京UFJ銀行 大阪京橋支店 普通 0072241
楽天銀行 第二営業支店 普通 7079724

理　事　今井 紀明、塩田 陵、村中 直人

監　事　毛受 芳高

スタッフ　川上 竜典、入谷 佐知、小薗 明日香、金子 祐樹、杉浦 智之、齊藤 寛子、
櫻木 良憲、丸山 祐生、林 紫月、西村 征輝、中川 沙登美、奥野 達也、
玉井 慎太郎、塩谷 友香、岩本 崇志、野津 岳史、熊沢 あずさ、
喜田 泰幸、下夷 瀬菜、東 和香奈、森下 祐子、磯 みずほ
［以下、2016年度内に卒業したスタッフ］
荒木 雄大、余島 純、永阪 佳世、西村 美保

顧問弁護士　高橋 健

写　真　西川 優介、荒木 雄大

デザイン・制作　NPO法人Co.to.hana

これから若者になるひとりひとりに
「つながり」と「経験」を。

認定NPO法人 D×P

［ 活動報告書 ］

2016-17

D×P ANNUAL REPORT 2016-2017



D×Pと、ひとりひとりの高校生をご支援くださっている皆様へ
感謝を込めて。

2015年秋。
そしていま、2017年6月を迎えて



「授業」だけじゃ、成果をだせないんじゃないか。

「授業」だけじゃ、成果を出せないんじゃないか ——

2015年の秋。

クレッシェンドは、定時制・通信制高校に通う、高校生が人とのつながり（社会関係資本）を得られるようにするためのD×P独自の授業プログラムです。

そこで、私たちはさまざまな生徒に出会いました。

毎回の授業を楽しみに来る生徒もたくさんいましたが、
暴れる生徒、下ネタしか言わない生徒、声を発しない生徒、
スマホを見たまま動かない生徒もいました。
ひとことも声を聞けないまま全4回の授業が終わったことも、
ありました。

学校の「授業」という場だけでは、
「人とのつながり」（社会関係資本）を築けない。

そんな暗澹たる想いを、私たちは持っていました。

それなら「授業」の外に出よう。

そして迎えた2016年度は「外」に意識が向かいました。

授業が終わったあとも高校に顔を出したり、学校の多目的室で遊んだり、D×Pの事務所で高校生と話せる企画をつくったり。そんな「授業」の外で、より生徒と関係性をつくり、社会関係資本をつくっていきました。学内には、食事提供を通して生徒とオトナが対話する場「いごこちかふぇ」もつくりました。

授業の「外」で会う機会を設けると、授業では見られなかった高校生の様子がたくさん見られました。授業では一切話そうとしなかった生徒がニコニコ話しかけてきたり。「バイト先が決まった〜！」と報告してきたり、「ふだん何してる人なん？」と興味を持ったり。

しだいに、「クレッシェンド」の価値も分かってきました。

ある高校生がいました。彼が1年生のときのクレッシェンドではずっと絵を描いていて、全く会話が成立しませんでした。全4回の授業を終えて、「これでよかったんだろうか」と思いながら学校をあとにしました。

1年後。2年生になって、私たちはまた彼と授業で出会いました。彼は、スタッフに寄ってきて「去年は斜に構えていたわ、ごめんな」と謝ってきました。そして、ワークに楽しそうに参加し、最後のプログラムでは自分のやりたいことを皆の前で話していました。

そんなことが、いくつもありました。生徒同士がクレッシェンドをきっかけに連絡先を交換していたとわかったり、自分がやりたいと思っていたことを始めた生徒がいたり。

もしかしたら、「否定しない」という姿勢で
関わった大人たちがいたことは、
彼らの心のなかに残っていたのかもしれない。
「D×Pのあの人と話せたし、ここでもいけるかも」
と、自ら人とのつながりを持とうと思えたかもしれない。
そのときすぐに反応は見られなくても。
「一人の人として大切に関わられた」という経験は、
必ず、そのひとのなかに残るんじゃないか。

クレッシェンドには、大きな価値がある。
それに実感がこもったのが、2016年度でした。

D×Pの可能性を、信じ続けてくださったひとがいる。

D×Pは、2017年6月で5周年を迎えます。

創業当初からこれまで、ひたすら動き続け、
何百回も試行錯誤し、泣き笑いしてきました。
それでもスタッフと同じように
D×Pの可能性を信じ続けてくださった方々がいます。

君がやることなら応援するよ、がんばれ！
と寄付してくださった人。
コンポーザーとして高校生に関わり、
スタッフに叱咤激励をし続けてくれた人。
学校の先生に授業の価値を伝え続けてくださった人。
寄付の新しい仕組みを共に考えてくださった人。

ひとりから始め、気がつけば万を超え。

そんな信じ続けてくださった皆様に、
D×Pがお返しできるフェーズが来たと思っています。

2016年度、私たちがやっと掴むことができたクレッシェンドの価値ですが、それでも「スタッフの実感でしかない」とも思っています。2017年度は、この「成果」を可視化するための動きを加速します。また、確立され始めたこのプログラムを必要としている地域・人に広げていきます。また、それにより見えてきた新規事業に向けたマーケティング調査・試行も始めています。

よりいっそうの挑戦と拡大をしつづけます。

“私は、あのD×Pを昔っから応援し続けているんだ”

10年後、そんなふうに皆様に
自慢してもらえるようになったら。

最高です。

認定NPO法人D×P（ディーピー） / 経営ボード

今井 紀明・川上 竜典・入谷 佐知



ひとりひとりの若者が自分の未 来に希望を持てる社会をつくる

D×Pは、通信・定時制高校の高校生に「人との つながり」と「成功体験」を届けるNPOです。

D×Pが取り組む課題



「自分の”これから”に
希望があると思えない」

日本には、そんな状況に
置かれている高校生がいます。

通信・定時 制高校には こんな10代が 集まっています。



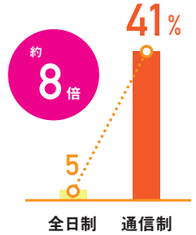
例えば…

- 定時制高校の生徒の 1/3がひとり親家庭
  ※生活保護家庭も多い
- 通信制高校の生徒の 60%が不登校経験
- いじめ経験・発達/学習障害・家庭暴力など様々な事情を抱えた高校生が多い

自分の未来に希望が持てないまま 社会に放り出される高校生たち

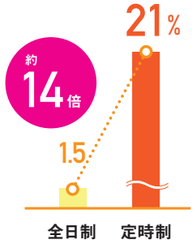
通信制高校

進路が決まらないまま
卒業した高校生の構成比

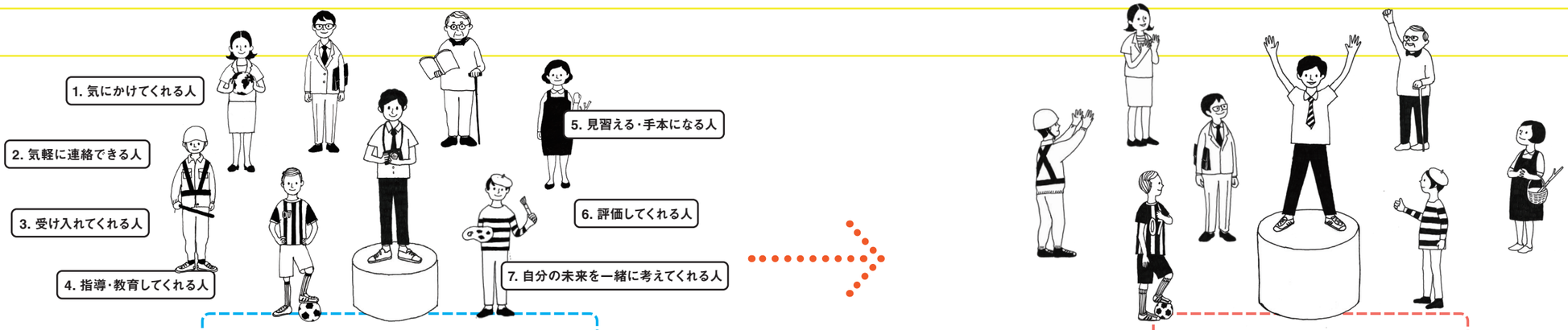


定時制高校

1年次に中退した
高校生の構成比



D×Pの活動



社会関係資本の構築

人とのつながりを築くことで、
これから生きるための支えになる土台をつくります。

成功体験の醸成

本人にとっての「できた！」という経験を積み重ねることで、
自分で自分を認められるようになります。

社会関係資本をつくる

授業

「クレッシェンド」

通信・定時制高校の高校生に特化した授業です。社会人ボランティアとの対話を軸にしています。



居場所

「いごこちかふぇ」

学内に食事提供を兼ねたカフェ「いごこちかふぇ」を週1〜2回開き、高校生の居場所をつくります。



つながりをつくる

「アフタークレッシェンド」

学校を飛び出し、D×Pの事務所で開催される写真部・アート部などの企画を通して、つながりをつくります。



成功体験をつくる

- 自分の好きなこと、長所を知る
- 人を信頼するハードルが下がる
- 自己受容感が高まる

「チャレンジプログラム」

宿泊型インターンや、スタディーツアーの参加、アート展・写真展などの開催など、その高校生の挑戦する場を提供します。



and NEXT…?



「社会ではたらく」に向けた新規事業

Highlights of 2016

2016年度・D×Pの取り組み

授業の外で出会う高校生を増やすことで、目指すべき事業の全体像が描けた1年

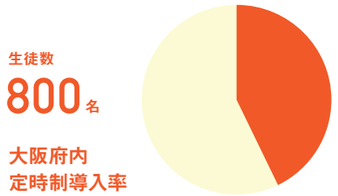
2016年度は、授業の外で出会う高校生の数を増やした1年でした。
「アフタークレッシェンド」では参加人数を30名→180名に伸ばし、新しい取り組みとして定時制高校の学校内につくるカフェ「いごこちかふぇ」をスタートさせました。
授業外での高校生の声を聞き続けたことで、授業「クレッシェンド」の役割とD×Pが目指すべき事業の全体像（P.17-18）を描くことができた1年でした。

① 通信・定時制高校に特化した授業「クレッシェンド」躍進！

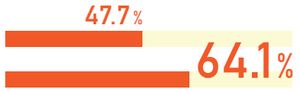


生徒数800名／大阪の定時制高校の4割以上に導入

通信・定時制高校を中心に17校・800名がクレッシェンドに参加。大阪府内の定時制高校の4割以上にクレッシェンドが導入されたほか、京都・滋賀・和歌山・札幌・東京でも展開。全国に広がっています。



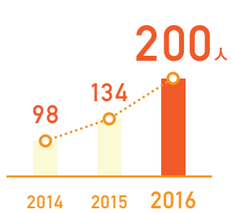
「また話したい」



クレッシェンドは、社会関係資本（人とのつながり）の構築を目指すプログラム。9校173名に行ったアンケートでは「オトナたちとまた話したいですか？」の質問に、「とてもそう思う」と回答した生徒はプログラム当初47.4%→授業終了後64.1%に。「そう思う」と合わせると88.8%（151名）の生徒がオトナたちとまた話したいと回答しました。

「否定しない」を体現するオトナたち

高校生と関わるD×Pのボランティア「コンポーザー」も200名に増え、D×Pの価値観である「否定しない」に共感し、それを体現するオトナが着実に増えていることの心強さを感じています。コンポーザー交流会も定期開催し、リピート参加に貢献しました。



② 会いに行く。つながりをつくる。



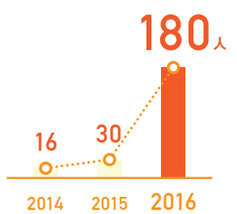
遊びに行きます！

クレッシェンド後に、学内で高校生・コンポーザーが遊ぶだけのお遊び企画を開催し、80名が参加。授業では聞けなかった声が聞け、なかには授業には来なかった高校生の姿も…笑。文化祭に訪れたり、学校に足を運んだりとすることで、D×Pスタッフが高校生の「顔なじみ」になっていました。

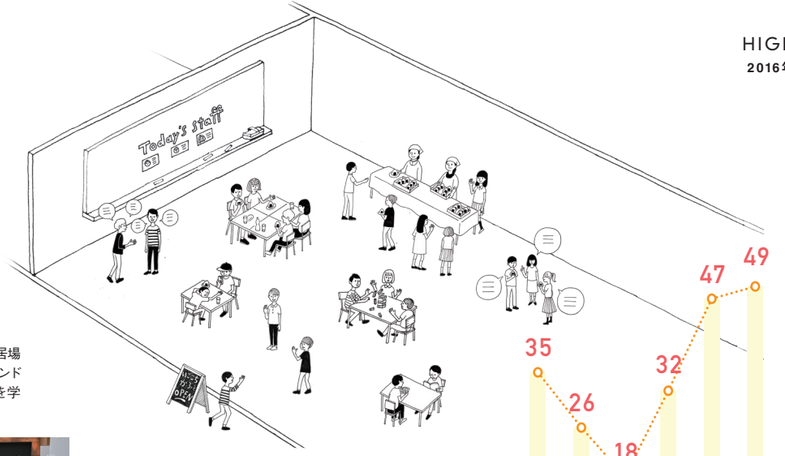


アフタークレッシェンドの開催。

2016年度は学校外で高校生と出会う場をつくり、より生徒との関係性を深めていこうと考え、年31回部活などの企画を開催し、延べ100名の生徒が参加しました。（2015年度は30名）趣味や遊びを通して、他校の生徒との交流を深めたり、自分のことを話せる場となっていました。



③ 定時制高校内カフェ「いごこちかふぇ」スタート



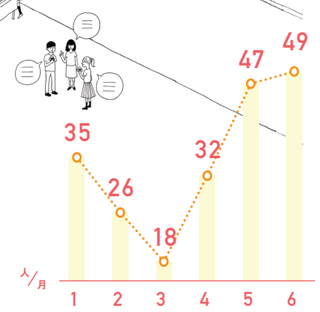
学内にいごこちのよい場をつくる

2017年1月から、ある定時制高校で食事提供を兼ねた居場所事業「いごこちかふぇ」をはじめました！おにぎり、サンドイッチ、お弁当を無償提供しながら、高校生の居場所を学校内につくります。



想定利用者数30名→50名超え！

当初想定した1回あたりの利用者数は30名ほどでしたが、50名を超える生徒が「いごこちかふぇ」を訪れるようになりました。生徒の間でも認知されるようになり、高校生のぶっちゃけトークから進路相談まで、やり取りが増えてきました。



月間平均利用者数

※4月〜6月は2017年度データだが、参考までに記載
※4/17の回は悪天候により、休校になったため除外した
※3月は年度末のため、生徒数が少なかった

④ 外へ。チャレンジプログラム

「名前はまだないアート展」を開催。

写真部 / アート部に参加した高校生のうち6名の高校生による、アート展を開催。表現を通して、人とつながったり、人から評価を得たりして成功体験を得る機会になりました。終了後、専門学校への進学や、自分の仕事について考え出すなど、変化のあった生徒も。



ワールドチャレンジ募金、始動。

しんどさを抱えた高校生に「世界を見る経験」を届けるためのプロジェクトをスタート。経済的困難や、不登校経験、発達障害など生きづらさを抱えた高校生が無料で海外のツアーに参加できるプログラムをつくり、2017年3月に4名の高校生を送り出しました。



Photo: 片岡 和志 / 中村 充利 / 佐野 友祐 / 正垣 直人

初めて「仕事って楽しいんだ」って思えた

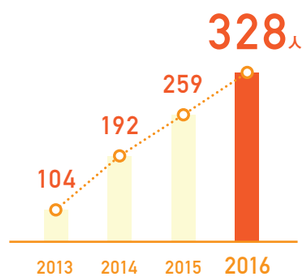
今年も秋田県五城目町・大分県湯布院町・島根県海士町などの地方に高校生10名をインターンとして送り出し、それぞれの地域や宿泊先の仕事を経験しました。「これまで僕は仕事は面倒くさいものでしかないと思ってた。でも、初めて仕事って楽しいんだ！と思えました」という声も。



⑤ ファンドレイジング組織基盤強化へ

個人の寄付者328名、協賛企業23社に

個人のご寄付をいただいた方が328名になり、協賛企業は23社になりました。財団からの支援も増えています。また、代表が寄付を集めるためにサハラ砂漠マラソンに挑戦し、これまで寄付したことのなかった方が興味を持つきっかけをつくることができました。



Webサイト / ロゴの改定

公式WEBサイトおよびロゴをリニューアル。訪れた人がD×Pに関わりやすいと思えるようなサイトづくりを目指しました。新しくなったロゴの意味は、裏表紙に書いてあるのでぜひ読んでみてください♪

認定NPO法人 D×P



クレッシェンド

CRESCENDO



通信・定時制高校の生徒に特化した授業

クレッシェンドは、多様なオトナとの関わりを通して、通信・定時制高校に通う高校生が社会関係資本（人とのつながり）をつくることを目的とした授業です。

クレッシェンドが目指すもの



自分の好きなこと、長所を知る



人を信頼するハードルが下がる



自己受容感が高まる

プログラムの特徴

1. オトナと高校生の「関わり」を軸にした授業

クレッシェンドは、D×Pの社会人・大学生ボランティア「コンポーザー」(=オトナ)と高校生との関わりと対話を軸にした授業です。高校生は様々なオトナの過去と現在の姿を知りながら、自分の過去と未来を考えていきます。

2. 「否定しない」姿勢

D×Pの基本3姿勢「否定しない」「様々なバックグラウンドから学ぶ」「年上・年下から学ぶ」を大切にしながら高校生と関わります。3姿勢を大切にすることで、「高校生」に関わるのでなくひとりの人として見て関わります。

3. 少人数&連続して同じメンバーと関わる

数ヶ月間、全4回以上にわたる授業では、同じ高校生に対して同じオトナたちが関わります。また、原則オトナと高校生の比率はおよそ1対3の少人数制。回数を重ねるごとに、少しずつ関係性を築いていくことができます。

4. 単位認定された授業

高校の「総合的な学習の時間」などの授業の枠組みのなかでクレッシェンドを行います。単位認定された授業のため、ある程度参加の強制力があり、しんどさを抱えた高校生にリーチしやすくなっています。

5. 授業後も繋がり続ける仕組み

D×Pでは、クレッシェンドのあとも学校外で高校生とつながり続けられる「アフタークレッシェンド」というプログラムや、高校生の「なにかやってみたい!」という気持ちに応える「チャレンジプログラム」があります。

授業導入校

【通信制高校】 ECC学園高等学校（大阪・京都学習センター）／YMCA学院高等学校（天王寺校・和歌山校）

【定時制高校】 大阪府立寝屋川高等学校／大阪府立春日丘高等学校／大阪府立布施高等学校／大阪府立和泉総合高等学校／大阪府立今宮工科高等学校／大阪府立佐野工科高等学校 大阪府立成城高等学校／大阪府立桜塚高等学校／大阪府立西野田工科高等学校／滋賀県立彦根東高等学校／札幌市立札幌大通高等学校

【全日制高校】 京都市立塔南高等学校／大阪府立西淀川高等学校

プログラムの内容例

全4回の授業の場合、例えばこんなプログラムを行います。学校や学年によって、内容やテーマは少しずつ変えています。

① アイスブレイク（自己紹介）



まずは自己紹介につながるワークをします。D×Pの授業の雰囲気を知ってもらい、コンポーザーと高校生がお互いのことを知り合うことが目標です。

② アイスブレイクと過去の経験談



コンポーザーと生徒がお互いのことをさらに知りつつ、オトナの過去の辛かった経験談などを聞きながら、自分の経験を俯瞰することが目標です。

③ アイスブレイクと自分史



付箋に自分の過去・現在・未来について書いて模造紙に貼り出します。生徒が自分の経験を振り返り、周囲に話し、認めてもらうことが目標です。

④ ユメお絵かきとユメブレスト



自分のユメ（大きな目標から、ちょっとやってみたいことも）を表現します。自分のこれからのことを考えて発表し、認められることが目標です。

生徒の様子



通信制高校生 **A君**

「自分はただの八方美人」

元気が良くて愛想が良い男の子ですが、「自分はただの八方美人」だと話していました。自分のことが嫌いで、親から理解してもらえずにいる生徒でした。

「自分はいろんなマスクをつけて人生を楽しんでいる。それも悪くないんじゃないかな。」と話をしたコンポーザーがいました。その話を聞いて「気を使える自分なのかもしれないな、と思った」と話していました。



定時制高校生 **Bさん**

「人が嫌い」

グループワークをするときに嫌がって廊下に飛び出した女の子がいました。スタッフが廊下で話を聞くと、「人が嫌い。何言ってんのか意味がわかんない。」と話をしたがらないようでした。

無理にワークの円にいれようとせず、教室の片隅で授業と違う雑談をスタッフの一人と楽しんだりします。そのうちワークにも参加しだして「なんか話せてよかった」と話していました。



定時制高校生 **C君**

「自分の人生終わってる」

「高校を卒業するだけでこんだけ頑張らなあかんやつなんてどこに行っても役に立たんやろ。」と自分の人生は終わっていると話していました。その生徒は、高校を変えて3校目だったそうです。

あるコンポーザーが彼の話を真剣に聞くと、自分のコンビニバイトでの努力をうれしそうに語ってくれました。授業の最後には「店長くらいなったるわ」と話していました。

コンポーザーとは?



コンポーザーとは、D×Pの授業に携わる社会人・大学生ボランティアのこと。高校生のことを気にかけたり、受け入れたり、一緒に未来について考えたりしながら関わるオトナのことです。

1.



高校生の話にじっくり耳を傾ける

コンポーザーは、一方的に教える立場にはありません。高校生の話に耳を傾け、ひとりひとりの背景に思いを馳せながら、高校生を受け入れる存在です。

2.



自分の経験を話す

自分の過去の辛かった経験談や、現在に至った経緯を高校生に話します。自分の考えを押し付けるのではなく「私はこうだったよ」と自分を主語にして話します。

3.



高校生と共に学ぶ

高校生と向き合うなかで、コンポーザーもまた自分の過去を受け入れたり、自分の良さややりたいことに気がついたりと、学びの機会になることを目指します。

コンポーザーから見た高校生の姿

色々な問題や悩みを抱えてもがくA君を見てきました。時に発言は私には理解できないもので、ただうなずく場面もありました。しかしそんな言葉を列挙しながらも、自分の置かれた状況を模索する彼の姿がありました。4回の授業を通して、彼のがんじがらめになった糸くずが一本ずつほどけていくような、そんな感じがしました。緊張しつつも自分のやりたいことを皆の前で話せたことはすばらしい一歩だったのではないかと思います。

授業のあいだずっと携帯を触ってる生徒がいたりして、どうしようかとも思いましたが、それは自分の心の持ちよう次第では重要でないことに気付きました。生徒の状況を理解すると、こちらが求めなくても、相手が勝手に変化してくれるという場面がいくつもあったのがクレッシェンドでの一番の学びです。

初めて関わったときは、質問に対しても「ない」「わからん」と隣の席の友人に同意することが多くありました。しかし、4回目の最後の授業では、その友人が同調を求めたときも、毎回同意することはありませんでした。意見を言わなくても「自分はそうは思わない」などの意思を表示していたことは、継続的に関わるなかでの成果なのかな、と思いました。

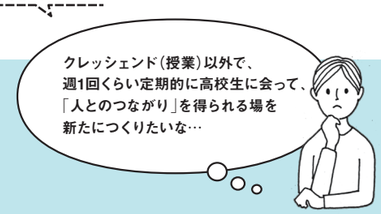


安心していられる場所を定時制高校のなかに

いごこちかふぇ

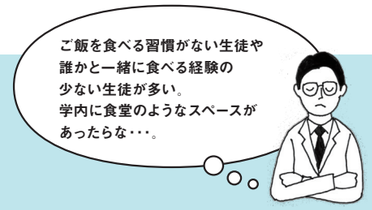
いごこちかふぇは、定時制高校の学内に開くカフェ。
地元産のおにぎりやサンドイッチなどの食事を提供しながら、
生徒が安心できる居心地のよいスペースを学内につくっています。

2016年夏ごろ



D×Pスタッフ

×



ある定時制高校の先生

＝

いごこちかふぇを2017年1月にスタート！

いごこちかふぇの特徴

1 定時制高校のなかにある週1カフェ

定時制高校のなかの1部屋を使って、毎週1回開催するので、高校生が出入りしやすい場になっています。※2017年度途中から、週2回に変更しています。

2 安心して話せる場

スタッフは生徒に「指導」しません。「否定しない」という姿勢をもって高校生と対話するスタッフがいることで、安心してなんでも話せる空間づくりを目指します。

3 食事の無償提供

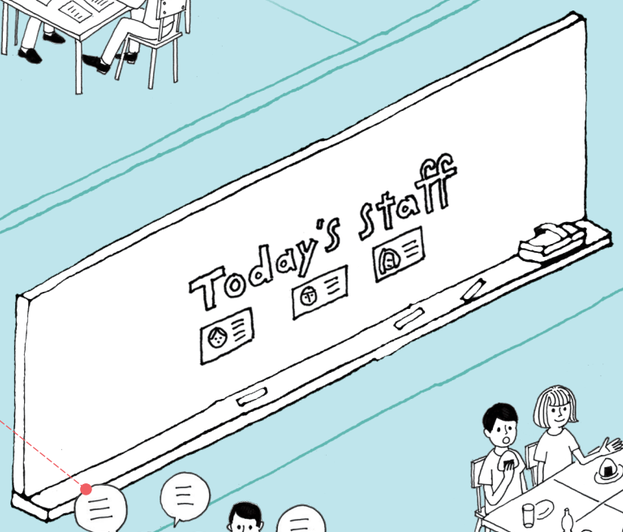
おにぎりやサンドイッチ、お弁当などを無償で提供します。地元のお店から仕入れており、お店の人が高校生に食事を配る配布係を担当！地域の人とのコミュニケーションの場にもなっています。



4 先生と密に連携

先生との定期的な情報共有をしています。いごこちかふぇを通して知った生徒の置かれた状況を共有し、必要に応じて別の支援機関につなげやすいようにしています。















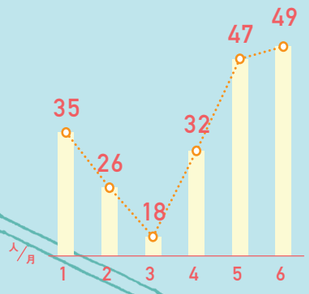
かふぇのタイムテーブル

17:30-18:00 始業前	ご飯（おにぎり、パン、弁当など）を用意	
授業時間 休み時間	授業への参加をうながせるように 始業時間から10分間はCLOSE	地元企業との連携
	遅刻者・教室に居られない生徒の居場所 話し相手のスタッフが常駐（2〜3名）	お菓子、ボードゲーム、漫画 などのアイテムを用意
21:15-21:30 放課後	放課後も立ち寄れる場所として運営 ヒヤリング事情を先生へ共有	

やってみてわかったこと

1 想定30名→最大50名越え！

30名の参加者数を想定していましたが、なんと最大50名の生徒が参加した日もありました。友達を連れてくるなど口コミでも広がっており、生徒からこの場が受け入れられていると感じます。



月間利用者数平均

※4月〜6月は2017年度データだが、参考までに記載
※4/17の回は悪天候により、休校になったため除外した
※3月は年度末のため、生徒数が少なかった

2 ぶっちゃけトークが増えてきた。

開催を続けるうちに、高校生のなかで「学校にいる大人だけど先生ではないらしい」という認知が広がってきました。他愛ない話から、過去に引きこもり状態になったことがあること、親と喧嘩したという話など、周囲に言いづらい話も出てくるようになりました。

3 食事が必要な高校生の多さ。

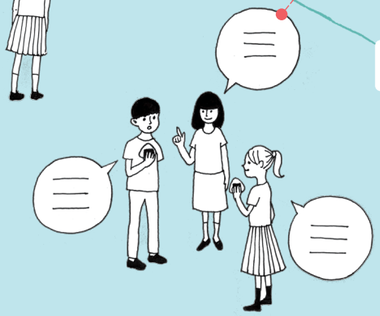
日中は仕事をして、夕方18時ごろから学校に集まってくる定時制高校の生徒たち。お腹をすかせていますが、時間やお金に余裕がないのでコンビニのご飯ですませたり、ご飯を抜いている生徒もいます。栄養が足りずに授業に集中できない事例もあるそうです。食事の無償提供がもたらす価値も少しずつ見えてきました。

4 進路の話が出るように。

「卒業したらアパレル業界に行きたい！」
「大学に行きたいから、働きながらお金溜めて高卒認定の資格の勉強をしたいと思っている。」
「この地域で絶対生きていきたい。でも仕事がないから難しい。」
「やっぱり高卒後は稼ぎたいし、自立しないと。」
そんな、働くことや進路に関する話も増えてきました。







見えてきた課題

1 生徒数増加によるスタッフ不足！

最大の1日利用者数50名をオーバーする日があり、対応にあたるスタッフ数が不足する状況が生まれています。資金的にも余裕がない状態のため、業務の効率化・資金調達・スタッフの獲得に向けて動いています。

2 おにぎり・サンドイッチだと足りない！

当初の予想以上に栄養がとれていない高校生が多く、「1人おにぎりor サンドイッチ2個まで」では足りなくてクラスメイトのものを取るなど、トラブルに発展するケースも出てきました。お弁当を導入したり、食べるのに時間がかかって授業に遅刻する生徒が出ないように声かけしたり…と今も試行錯誤しながら取り組んでいます。



アフタークレッシェンド

AFTER CRESCENDO



つながりをつくる

アフタークレッシェンドは、授業を終えたあとも学校の中や外で、高校生とまた会い継続的なつながりをつくる場です。
2016年度は、授業以外で高校生と関わる場を増やすことを目標に試行錯誤しながらそれぞれの企画を開催しました。

D×P男子会

実施回数：8 回

男子同士でお菓子を囲んで、大画面でゲームをやったりトランプをしたりと様々な遊びをしながらいろいろな話を楽しみました。



高校生より

「またD×Pの人たちと会えて嬉しい」
「友達の家で遊ぶってこんなかんじかな」

スタッフ西村より

「また来たいです」「次はいつですか？」と自分から聞いてくる生徒がいたり、友達を誘って来る生徒がいたりと、生徒にとって楽しみな場になっているようです。また、自分からはあまり話そうとしない生徒が、男子会では最近あった出来事を自分から話したり、彼女とのことを相談したり、男子会でやりたいことを言ったりと、安心して話せる場になっているようでした。

D×P女子会

実施回数：10 回

キャンドルづくり・浴衣の着付け・ネイルチップづくり・タッセルピアスづくりなどの企画をしながら女の子同士でゆったりおしゃべりしました。



高校生より

D×Pの女子会ってどんなとこ？という質問に対し、「家と学校とはまた違う、落ち着けて楽しめる場所です！」、「んー、難しい質問やな笑　楽しい場所、落ち着く存在かなー？」

スタッフ熊沢より

クレッシェンドでは受け身だった生徒が女子会に来て早々「見て！綾野剛に会ってきてん！」と写真を見せてくれたり、授業では見られない顔を見せてくれることが多いです。開催中自ら発言することはない生徒も「次はいつ？」と聞いたり、Twitterで「最近女子会行ってないから行きたいな～」とつぶやく生徒もいたりと、この場を楽しみにして、話を聴いてもらえる場として認識してくれているのかなと感じます。

写真部

実施回数：5 回

天王寺動物園や星のブランコ、赤目四十八滝などを訪れながら写真を撮って見せあいながら話しました。後半はアート展の準備をしました。



高校生より

「人とのつながりができる大切な場所ですね。」「普段しゃべらない子としゃべったりが楽しかったですー！」

スタッフ川上より

写真部の活動後に生徒同士で遊びに行ったり、共通の趣味で盛り上がったりと、交流が深まっているようでした。後半はアート部と合同でアート展を開催したことで、準備の過程で他校の生徒とのつながりを広げていました。赤目四十八滝と穂高湖には写真部の先輩が車を出してくれ、アート展でも先輩が協力しながら進むなど、先輩/後輩のつながりもできていたようでした。

アート部

実施回数：7 回

オリジナルTシャツづくり、スノードーム、マグカップづくりやアートフェスタへの訪問を行いました。後半はアート展の準備をしました。



高校生より

「他校の生徒といろいろ話すことができて嬉しかった。人と話すのが苦手だったけど、D×Pやアート部のみんなのおかげで、人と話すのがとても楽しいものなんだと思った」

スタッフ小薗より

アート部は、共通の趣味を通して人と話したり関わりあえる場です。もともと人見知りだった生徒も絵を描くことを通じて新しく知り合った人とも気さくに話したり、人とのコミュニケーションを楽しむようになっていました。またある生徒は、雑談の中で自分の病気の話などをスタッフやコンポーザーに打ち明けるなど、自分の深いところも話せる場となっていました。

チャレンジプログラム

CHALLENGE PROGRAM



「できた!」と思える経験をつくる

「チャレンジプログラム」は、高校生の「なにかやってみたい!」という気持ちに応えて、その生徒にとっての挑戦となる機会を届けています。
本人が自分なりに「できた!」と思える経験を積むことは自信やこれからのアクションにつながっていきます。

ワールドチャレンジ募金

ワールドチャレンジ募金は生きづらさを抱えた高校生に「世界を見る経験」を届けるための寄付プログラム。参加を希望する高校生を募り、無料でピースボートのショートクルーズに挑戦できる仕組みです。前進の企画で1名を送り出し、3月に4名の高校生を送り出しました。



寄付を通してクルーズに乗船した
高校生のレポートから

「想像していた以上に、濃密であたたかな旅でした。さまざまなバックグラウンドを持った人たちとの出会いがあり、同じ船の中で行動を共にし、気持ちを共有して、一緒に考えることのできる仲間たちと巡り会うことができたのは、大きな財産です。さまざまな生き方を見て、自分の将来を以前よりも具体的に考えることもできました。

スタッフ今井より

この生徒は子どものときから母子家庭で、生活保護を受給しています。お母さんはパニック障害などの精神的な疾患もあって、ネグレクト（育児放棄）状態になったため、小学生の頃はひとりでご飯を食べることもあったそうです。でも、今はお母さんと本人で話し合い仲が良くなっています。定時制高校に入学後、海外に行ったことがある先輩に出会い、興味を持ちます。その先輩はDxPとも関わりのある生徒でした。ツアー中に大学生に会い進学を考え勉強しますが、進路を変え、現在は正社員として働き始めています。

名前はまだないアート展

大阪のギャラリーで展示会「名前はまだないアート展」を開催しました。「自分がつくって楽しむ」でなく「それを人に見せて評価される」という挑戦です。4日間の展示会で、来場者は延べ70名。偶然訪れた近所の方が高校生の写真を見て感化され、翌日ご自身の絵を持ってこられる…！という嬉しいエピソードも。



アート展で作品を展示した
高校生の言葉

「なんでここに居る人や来る人は、こんなにXジェンダーについて理解があるの！？」
「今回のアート展で写真部のメンバーたちとの人間関係を得られた。あと自分の中の写真への思いが少し変わった。今までは「見えるもの」しか撮っていなかったけど「見えたもの」を撮れるようになった気がする。」

スタッフ小薗より

この生徒はXジェンダー（※男性か女性か定まりきらず、流動的に変化すること）であり、解離性障害も持っているためストレスを抱え易く、年に数回入院生活を余儀なくされています。その入院中に「男性の時の自分」と「女性の時の自分」が撮った写真を1枚ずつ出展。作品の説明を通し、自分の抱える背景を伝えることで、「自分のことを受け入れ、理解をしてくれる人がこんなに居るんだ！」ということを驚きを持って実感したそう。現在医師の指示により就労できない状況ですが、アート展最終日に「自分をありのままで受け入れてくれる場所で働きたい」という意思をはっきり表明。「DxPで働くにはどうすれば良い？」と具体的に質問してくる場面もありました。

地方インターン

今年度も、秋田県五城目町、大分県湯布院町、島根県海士町などの地方に高校生をインターン生として1週間～10日ほど送り出しました。農作業や旅館の手伝い、イベント運営の手伝いなどを行うことを通して様々な人に出会います。



秋田県五城目町でインターンに行った
高校生のレポートから

今まで僕は「仕事なんてしたくない」とか「仕事の何が楽しいの？」と、ただ面倒くさいものでしかないと思っていました。けれど、本当に楽しそうに仕事しながら「楽しいよ！」と言われた時、初めて「仕事って楽しいんだ！」と思えました。「人は一人では何もできない」この言葉が本当にそうなんだと思えたのは、秋田で知り合った人たちのおかげです。

スタッフ 小薗より

彼は、中学時代に不登校の経験があり通信制高校に入学。クレッシェンドや写真部での関わりを経て、人とのつながりを持つことができていましたが、長年「働くこと」に対してはマイナスのイメージを持っていました。しかし、五城目町でのインターンをきっかけに、働くことに対して前向きになり、「自分のやりたいことが少し見えてきた気がします」と語っていました。彼は2017年3月に通信制高校を卒業し、現在はアルバイトをしながら車の免許の取得を目指しています。将来のことはまだぼんやりしているけれど、「次世代のサポートをするなんらかの活動をしたい」と考えているそうです。

D×Pのスタッフはこんな人たちです。

2012年に職員1名・インターン生数名から始めたD×Pも、現在は職員7名・インターン生16名の大所帯になってきました。一部のスタッフをご紹介します！

①D×Pでこんなことしてます ②D×Pで大切にしていること
③D×Pの好きなところ ④あなたのユメはなに？



いまい　のりあき
今井 紀明 理事長

① 経営、財務、採用、就労支援とか全般的に仕事をしているかもしれない笑
② スピード、効率化、その人の適正、コミュニケーション。そういうのを大切にしているし何よりも大切にしているのはビジョンに対して何をイメージしていき、それをどう具現化させていくのかを日々考え続けること。
③ 自分たちで職場を作っていく雰囲気がすごく好き。ひとりひとりがそれに貢献している気がする。
④ 世界の若者支援と紛争解決

#マラソン #読書 #アニメ
#youtube #ゲーム実況
#旅 #経営者

Noriaki Imai



かわかみ　たつのり
川上 竜典
生徒と社会をつなぐ事業部 部長

① 高校生が、人とのつながりを得ていけるようにすること。その仕組みづくりをしています！
② 現場の視点。通信・定時の高校生の視点。
③ ない！好きも嫌いもないから居心地が良いと思ってる。
④ 時計職人

#現場第一 #場づくり #マネジメント
#凝り性 #合理主義 #サッカー #数学
#たまに高校教師 #オシャレ好き
#古い物好き #時計
#古民家でワークショップ
#字が汚い #無関心

Tatsunori Kawakami



いりたに　さち
入谷 佐知
広報・ファンドレイジング部 部長

① D×Pと社会をつなぐ仕事。PRと、資金調達全般の仕事をしています。
② 言っていることとやっていることが一致していること。
③ “常識”や“普通”は求められないところ
④ ひとりひとりが自分らしくおもしろく生きられる組織と社会をつくる

#広報 #PR #マーケティング #空手
#母 #夫ラブ #図太い #楽観的
#スルースキル高い #16時20分に帰る

Sachi Iritani



かねこ　ゆうき
金子 祐樹
生徒と社会をつなぐ事業部 スタッフ

① クレッシェンドの現場運営を担当しています！高校生、コンボーザー、スタッフのことを考えるのが主な仕事です！
② 現場では目の前の生徒の可能性をあきらめないことを大切にしています！
③ たくさんの人と出会えるところ。社内のひとりひとりの成長を願った体制づくりを行うところ
④ やさしくておもしろいおじいちゃんになること

#新潟出身 #お酒好き
#雑談好き #笑いに貪欲

Yuki Kaneko

こぞの　あすか
小薗 明日香
生徒と社会をつなぐ事業部 スタッフ

① 生徒と社会をつなぐこと
② 心身共に健康で楽しく仕事をできる状態であること。日々接する生徒たちは、身近に居る大人を通して自分のこれからを想像すると思うので、自分自身がその身近な大人の一人として「社会に出て働くことは楽しい」と嘘偽りなく体現出来ている状態をいつも大切にしています。
③ 「やりたい」気持ちを最大限応援するところ。一人ひとりの個性を尊重し、仕事外での人生も互いに理解し大切にしているところ
④ 人の可能性を具現化（又は証明）出来る能力を持つ人になりたい

#夢想家 #ジブリ #お昼寝 #夜行性
#無垢の木が好き #自然に戻りたい
#我は強いが、周囲に染まりやすい
#そよ風のように心地良い人（になりたい）

Asuka Kozono



すぎうら　さとし
杉浦 智之
経営管理部 スタッフ

① ざっくり経理・総務・人事・IT管理・広報FR業務
② たくさん失敗してもいいから、一歩でも半歩でもたくさん踏み出せる大人でありたい！踏み出せる人は必ず周囲からも愛されると思う！
③ 自由な雰囲気で自分の可能性を十二分に引き出すことができる！が、自由度が過ぎてて時にまとめるのが大変である…笑　それが面白くもある！
④ 「日中の心の架け橋」「DxP関東支部の構築と、若者と社会の心の架け橋」

#あだ名はシャンプー #中国 #面倒くさがり
#Excel #ものづくり #温泉 #バイク #車
#電車 #VOCALOID #お酒
#神奈川県出身 #横浜最高

Satoshi Sugiura



さいとう　ひろこ
齊藤 寛子
広報・ファンドレイジング部 スタッフ

① DxPの魅力を発信すること、DxPのファンを増やすこと、がお仕事です。
② 納得感、進化、妥協しないこと、自由な発想とインスピレーション、お互いに気持ちの良いコミュニケーション、自分の仕事が未来の社会と個人の幸せに繋がっていること
③ 働き方がとってもフレキシブルなところ・どんなミスも誰のせいにもしないで、みんなで解決していこうとする姿勢・関わる全ての人の、その人らしさをとても尊重しているところ
④ 子どもたちもどんな人も、納得出来る素直な一歩を何度でも踏み出せる寛容な社会を創ってゆくこと

#キャリアコンサルタント #発達心理
#素直に生きたい #美味しいもの食べてれば幸せ
#旅 #アート #涙脆い #東京出身
#デュアルライフ #自由人
#好奇心ノンストップ

Hiroko Saito



組織図

2016年度は、政策提言部門を新たに設け4部門体制で行いました。

（※ 2016年4月〜3月までに働いたことのあるスタッフ名と、2017年6月時点での現在のスタッフの名前を入れています）

理事会
理事長　今井 紀明
理事　村中 直人 / 塩田 陵
監事　毛受 芳高

経営ボード
今井 紀明
川上 竜典
入谷 佐知

生徒と社会をつなぐ事業部
部長　川上 竜典
小薗 明日香 / 金子 祐樹
野津 岳史、熊沢 あずさ、永阪 佳世、櫻木 良憲、丸山 祐生、林 紫月、西村 征輝、中川 沙登美、奥野 達也、玉井 慎太郎、塩谷 友香、岩本 崇志

広報・ファンドレイジング部
部長　入谷 佐知
齊藤 寛子、荒木 雄大、余島 純、西村 美保、喜田 泰幸、下夷 瀬菜、東 和香奈

経営管理部　部長　今井 紀明　杉浦 智之、森下 祐子

政策提言部　今井 紀明、川上 竜典、塩田 陵、内田 康弘（名古屋大学）

組織体制に関わる施策

バックオフィスの基盤固め

個人情報保護とセキュリティ強化

UTM（総合的なウィルスなどの脅威管理）の導入や事務所内外での情報管理 / 書面管理の仕組みづくりを行いました。

「らしい」人事制度づくり

お昼寝制度・引きこもり制度・私のゴールデンウィーク制度など、社内のニーズに沿った人事制度を構築し、はたらきやすい環境を整えました。

業務効率化でスルッと仕事！

経理フォームの改善・給与計算のシンプル化、アンケートの集計改善など業務効率化を促進しました。



ファンドレイジング / 組織基盤強化へ

経営ボードの発足

今井・入谷・川上の経営ボードの発足および組織の意志決定体制の再構築をはかりました。また、会議体の設置・合宿や全体ミーティングなどを実施し、ビジョンや組織の方向性、事業部ごとの進捗管理体制を構築しました。

たくさんの方に支えていただいた1年

D×Pが、経済的にしんどさを抱えた高校生が集まる公立高校でプログラム導入が実現できているのは、
ご寄付・ご助成いただいてる方のおかげです。一部となりますが、サポーターの皆様をご紹介します。

●スポンサー企業・個人の皆様（一部 / 順不同）

（故）福武純子様

株式会社近畿サービス様

成基コミュニティグループ様

株式会社ココウェル様

公益財団法人長谷福祉会様

アフィリエイト部長様

花王ハートポケット倶楽部様
花王株式会社様

株式会社NAOMI様

チャットワーク株式会社様

有限会社サワキ様

株式会社日本駐車場サービス様

株式会社りんゆう観光様

野澤会計事務所様

株式会社
土屋ホールディングス
土屋　公三様

土屋ホールディングス様

株式会社アウラ
星川 祐貴様

株式会社アウラ様

北海道ボラコン株式会社様

CREAVEL株式会社様

きょうどう経営株式会社様

株式会社なるほどゼミナール様

SOCIUS VALUE株式会社様

個別指導アップ学習会様
（株式会社パーソナル・サポート様）

株式会社さくら様

株式会社自在
遠藤正彦様

株式会社自在様

●助成団体

Panasonic NPOサポートファンド /
フィル・ファンデーション / 日本財団 2016年度 子供の
未来応援基金 / 財団法人熊西地域振興財団

●募金箱設置店

ケーキ屋さんこいまり様 / 旬菜鮮魚てつたろう
梅田中崎町店様（株式会社フォーシックス様）/
リバーカフェ天満橋 / イタリア料理 小西屋様 /
NPO法人フリーヘルプ様 / ひなぎくデイサービス様 /
和彩厨房KATURA様

●マンスリーサポーター・単発寄付をいただいた方

328人

2016年度はマンスリーサポーター（定額寄付会員）の皆様が291名、単発自由寄付をいただいた方が37名となりました。「自分の子どもも不登校だったけど、その時は何もできなかった。せめて寄付したい」「これからを担うのは若者だから、ちょっとでも足しになれば」ご寄付と一緒に、そんなあたたかいお言葉をいただいています。

●サービス無償提供・間接寄付・高校生受け入れ企業

ビッグイシュー基金様 / 時のかけら様 / PaKT company合同会社様 / 旅館 但馬屋様 /
コミュニティユースワーカー柳澤龍様 / 国際交流NGO PEACE BOAT様 / NPO法人アクセス様 /
株式会社セールスフォース・ドットコム様 / チャットワーク株式会社様 / スペースふうら様 / デザイナー・北井祐子様

MEDIA メディア掲載歴（一部）

新聞

2016.09 北海道新聞（朝刊）「今日の話題」
2016.10 朝日新聞全国版（朝刊）「子どもと貧困　中退防止へ 支援手探り」
2016.11 毎日新聞全国版（夕刊）「憂楽帳 チャレンジする大人」
2017.01 読売新聞全国版（朝刊）「セカンドチャンス　挫折した若者の力に」
2017.01 朝日新聞関西版（朝刊）「挑む！人質体験乗り越え　生徒支える」

テレビ

2016.07 読売テレビ「かんさい情報ネットten」

雑誌

2016.04 寄付ラボBook02「寄付つき商品の新たな可能性〜関西の先進的な取組み〜」
2016.10 ココナティスト冬号「ココファンド報告会@cocowell cafe」
2017.03 THE BIG ISSUE JAPAN「ビッグイシュー基金通信」

インターネットメディア

2016.08 ロゴポータルサイト「ロゴストック」にてロゴ紹介
2016.12 ハフィントンポスト日本版

AWARDS 受賞歴

2016.04 「大阪商工信用金庫　社会貢献賞（ソーシャルビジネスの部）」受賞
2016.08 「第6回近畿地区版人間力大賞」教育・スポーツ等青少年育成部門受賞

● 2016年度 収支計算書（2016年4月1日から2017年3月31日まで）

（単位：円）

科目	金額		
Ⅰ 経常収益			
1. 事業収益			
教育支援事業収益	7,355,696		
講演活動事業収益	1,081,748	8,437,444	
2. 受取寄附金			
受取寄附金	34,132,307	34,132,307	
3. 受取助成金等			
受取助成金	7,524,000	7,524,000	
4. 受取会費			
正会員受取会費	25,000		
賛助会員受取会費	0	25,000	
5. その他収益			
受取利息、他	286	286	
経常収益計			50,119,037
Ⅱ 経常費用			
1. 事業費			
（1）人件費			
給料手当	17,326,940		
法定福利費	2,255,106		
	19,582,046		
（2）その他経費			
旅費交通費	4,172,530		
賃借料	699,027		
印刷製本費	0		
消耗品・備品費	130,267		
雑費他	5,831,245		
事業費計	10,833,069	30,415,115	
2. 管理費			
（1）人件費			
給料手当	6,862,055		
法定福利費	876,901		
	7,738,956		
（2）その他経費			
旅費交通費	3,579,943		
賃借料	423,213		
消耗品・備品費	783,850		
通信費	271,407		
雑費他	4,362,810		
管理費計	9,421,223	17,160,179	
経常費用計			47,575,294
当期経常増減額			2,543,743
Ⅲ 経常外収益			
-		0	
経常外収益計			0
Ⅳ 経常外費用			
-		0	
経常外費用計			0
税引前当期正味財産増減額			2,543,743
法人税、住民税及び事業税			70,000
当期正味財産増減額			2,473,743
前期繰越正味財産額			978,374
指定正味財産増減額			36,509,781
一般正味財産増減額			0
次期繰越正味財産額			39,961,898

※ 今年度はその他の事業を実施していません。

定時制高校のプログラムは増加しましたが、通信制高校のプログラムが減少したため、450万円の減収となりました。

寄付会員・スポンサー企業の増加により、昨年度より1,600万円の増収となりました。

英国Fill Foundation（ファンドレイジング基盤強化）、PanaconicNPOサポートファンド（経営基盤強化）、熊西地域振興財団（公立の定時制高校でのクレッシェンド）からの助成・および大阪商工信金社会貢献賞の賞金をいただきました。

2016年4月に事業部メンバー正社員1名が加わり、人件費の増加となりました。

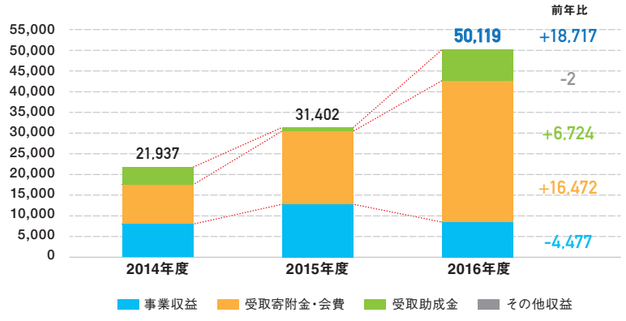
札幌や東京でのプログラムや泉佐野地区でのプログラム実施数の増加、および全国での講演活動が増加したため、旅費交通費が103万円の増加となりました。

2017年2月に管理部メンバーに正社員1名が加わり、人件費の増加となりました。

公式WEBサイトの改定など広報およびファンドレイジングの強化に向けた取り組みを行いました。

指定正味財産として定時制など公立学校でのプログラム・居場所事業の支援の拡大のために寄付をいただいており、2017年度〜2018年度の事業拡大のため非常に大口の寄付をいただきました。また、ワールドチャレンジ募金の寄付もいただいており、生徒100名をまずは海外に送り出すために使途限定の寄付もいただいているため、繰越金が多くなっています。個人の資産家からのご寄付に感謝です。

● 経常収入 3期比較（単位：千円）



この収支計算書は会計帳簿の記載金額と一致し、認定特定非営利活動法人D×Pの収支を正しく示していることを認めます。



めんじょう よしたか
監事 毛受 芳高

一般社団法人アスパシ教育基金 代表理事

1999年NPOアスクネット設立。学校と地域をつなぐキャリア教育コーディネーターのモデルをつくり、国と連携し、全国へと拡大。その後「一般社団法人アスパシ教育基金」を設立。

D×P's PROSPECTS of 2017-2019

2017年度以降のD×Pは、新規事業の立ち上げに伴う新しい事業体制を構築します。
また、通信・定時制高校に特化したプログラム「クレッシェンド」の地域展開、いごこちかふぇのモデル事業としての確立を目指します。

1 D×Pは、新事業体制へ

通信・定時制高校の生徒が自分の未来に希望を持てるようになるために。

D×Pの新事業体制構想

これまで取り組んできた「社会関係資本をつくる ＋ 成功体験をつくる」という2軸に加えて、「卒業後も働き、学び続けられる」という新しい軸を加えます。

社会関係資本をつくる ＋ 成功体験をつくる ＋ 働き、学び続けられる（NEW）

生徒と社会をつなぐ事業部
高校生が「人とのつながり」を構築できるようになるために学校・地域のなかに仕組みをつくる事業部

就労支援・コミュニティ創出事業部
高校生が卒業後、働き続け、学び続けていけるようになるための就労支援を行う事業部

高校生と、D×Pの事業マップ

D×Pでは、高校生の卒業後の進路に向けた「就労支援・コミュニティ創出事業（仮）」をスタートします。2017年度はマーケティング調査と試行実施を行い、2018年度から本格スタートする見込みです。

1年生	2年生	3・4年生	卒業後
クレッシェンドで横のつながりをつくる	自分のこれからを考える		
	それぞれの成功体験をつくる	自分の道を定めていく	
週1〜2のいごこちかふぇで、会える、話せる			
D×P事務所（アフタークレッシェンド）で会える、話せる			

就労支援・コミュニティ創出事業部

就労支援・コミュニティ創出事業部の取り組み内容については絶賛議論中ですが、ちょっとだけ、いまD×Pスタッフが考えていることをご共有します。

- 「“就職”でも“進学”でもない、別の道」を新しく創造できないか？
- 卒業後、当たり前にキャリアシフトできないか。また、キャリアシフト時に支えられる場をつくれないか？
- 「想いがあり、スタッフを成長させていける企業」「新しい価値を創造できる企業」「多様性の高い企業」と高校生をマッチングできないか？
- 高校生の個性や強みが活きる場が、地方やコミュニティにあるのではないか？

2 クレッシェンドの展開と、価値の見える化へ。

全国からのオファーに応えつつ、プログラムの質を高め・社会的成果を測定

通信・定時制高校に特化した授業「クレッシェンド」は、既に2年前から全国の高校から「うちの学校に来てほしい！」というオファーを頂いています。2017年は、大阪・京都・滋賀・和歌山・札幌・東京に加えて、新しく岡山・兵庫でもクレッシェンドを実施予定です。
そして2019年度までに、以下の地域での展開を見込んでいます。

また、展開ばかりではなく、職員が2016年度に実感した「クレッシェンドの価値」が、どなたにでも理解していただけるように。2016年度からスタートしたソーシャルインパクト測定チームの動きを加速し、定量的データとしてお伝えできるように取り組みを進めています。



3 いごこちかふぇは1校→2校へ。地域の企業 / 就労支援とも連携

学内カフェ「いごこちかふぇ」は、2018年度中に1校→2校での実施を目指します。また同時に、いごこちかふぇ内で進路の話も出るようになっていることから、就労支援・コミュニティ創出事業と連携したり、地域の企業と連携して学外での企画を運営するなど、いごこちかふぇを土台にした新しい取り組みを模索していきます。



D×Pの歩みと、これから。

2012年に設立し、通信制高校1校からスタートしたD×P。たくさんの試行錯誤を経てここまで来ましたが、まだ道半ば。新事業を迎えてさらに拡大と成長を続けます。

今後はD×Pの強みである「学校の先生との協力体制づくり」を活かし、学校を起点として、企業・行政・NPO団体・地域住民などの外部と連携をしながら高校生と社会をつなげていきたいと思っています。

